唯物論研究協会第1分科会「マルクス」 2010/10/17

マルクス物象化論の核心
ー素材の思想家としてのマルクスー

一橋大学社会学研究科博士課程　佐々木隆治

はじめに

マルクスの物象化論についての先行研究は数多い。しかしながら、多くの場合、とりわけ「哲学・思想」の立場からなされる物象化論研究はそもそもの問題構成じたいを取り違えてきたように思われる。典型的なのが廣松渉らの物象化論であるが、それを批判する論者も多かれ、少なかれ、この枠組みにとらわれてきた。廣松のように物象化論たんなる認識論的転倒と同一視するのは論外だとしても、人格的関係が物象的関係として現れることで前者が後者によって隠蔽される事態として物象化論を理解する解釈は依然として一般的である。

それにたいし、非常に重厚な蓄積を誇る「マルクス経済学」の立場からなされてきた物象化論研究においては、久留間鮫造らの先駆的な価値形態論・物神性論・交換過程論研究をつうじて[*1]、その基本的な論理が解明されてきた。とはいえ、その場合でも、物象化論が主題となっていたわけではなく、その「実践的・批判的」意義が十全に明らかにされてきたとは言い難い。

マルクスの理論的批判がたんなる「世界の解釈」にとどまらず、「世界の変革」のために為されたものであるかぎり[*2]、物象化論を理解するということは、たんに難解な知的パズルを解くということではなく、なによりも、その「実践的・批判的」意義を理解することでなければならない[*3]。というのも、理論の次元において虚偽を暴露したり、資本主義を倫理的に糾弾することにではなく、変革実践にとっての現実的諸条件を掴み、その現実的可能性を明らかにすることにこそ、マルクスの理論的実践の目的があるからである。

1，物象化論における無意識の形態的論理

①「物神性」節の物象化論

マルクスの物象化論は重層的であるが[*4]、その根本は『資本論』第一巻第一篇第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」において与えられている。しばしば誤解されているが、物神性論はなにも物神崇拝だけを扱っているのではない。むしろ、物神崇拝を生み出さざるを得ない商品の物神的性格とその秘密を明らかにすることが主題となっている。商品の物神的性格の秘密こそが物象化に他ならず、この物象化がなぜ生じるのかが論じられるのである。第一章第一節から第三節までの議論は、この物象化を先取り的に前提して論じられているのであり、第四節を理解することで第三節の価値形態論がもつ深い意味も明らかとなる[*5]。

共同体とは異なり、私的諸個人が社会的分業を成立させているという関係においては、生産者たちは私的個人として個別化され、人格的紐帯を断ち切られているために、彼らの労働は私的な営みとして行われるほかなく、直接には一般的・社会的性格をもつことができない。それゆえ、私的諸個人の労働は、労働生産物どうしの関係をつうじて、社会的総労働の一分肢であることを確証し、社会的性格を獲得するほかない。だからこそ、諸個人の具体的な有

用労働が直接に社会性をもつのではなく、むしろ生産物という物 Ding が物象 Sache として社会的力を獲得する。私的生産者たちは、自らの私的労働が直接には社会性をもたないがゆえに、労働生産物にたいしてそれに社会的力を与えるようにして関わり[*6]、これによって社会的な連関を成立させるのである[*7]。このとき生産物に与えられる社会的属性のことを価値と呼び、価値という属性を持つに至った物を商品と呼ぶ。むろん、諸個人はこの過程を自覚的に行っているわけではない。私的所個人への分裂ゆえに、無意識のうちに以上のような物象化した関係を形成することを強いられるのである。

それゆえ、私的生産者たちにとっては、諸個人の社会的連関は現に存立している社会的連関として、すなわち物象的連関として現れるほかない[*8]。というのも、そもそも私的諸個人が物象的連関を作り出したのは、人格同士の直接的な関係を結ぶことができず、物象的連関においてしか自らの私的労働の社会性を確証できなかったからである。

このように、私的労働にもとづく社会的分業においては、直接的な人格的結合が断ち切られているために、必然的に労働生産物が物象として社会的力を獲得し、人格の社会的関係が物象の社会的関係として現れる。これが物象化である。ここでは、労働の社会性は物象的連関を媒介して事後的に示されるほかなく、したがって、物象的連関が成立しなければその労働は社会性を獲得することはできない。そのような意味で、商品生産関係においては、労働をめぐる諸関係が物象の諸関係として現れ、物象の運動が人間たちの行為を規定する、という転倒が現実に存立する[*9]。ここではたんに人格的な関係が物象の関係によって覆い隠されているだけではなく、物が物象となって実際に社会的力を持ち、人間の行為を制御する。そのような意味で、物が物象となり、人格が物象化されることが、マルクスの物象化論の肝なのである。

②物神崇拝との区別

なお、俗説のように、ほんらい関係の中ではじめて帯びるに過ぎない物の社会的属性をその物じたいの属性として「取り違え」ること（＝物神崇拝）を物象化と呼ぶのではないことに注意されたい。そのような認識論的次元の「取り違え」は物象化の結果にすぎない。たしかに、物象化の次元においても、この商品生産関係におかれた人間にとっては、人間の労働ではなく、物象が社会的力を持つものとして現れ、私的労働と私的労働の関係は隠蔽されるのであり、その限りで認識に関わる契機を含んでいる。だが、私的諸個人に分裂した諸個人にとっては労働をめぐる関係は、不可避的にそのような物象の関係として現れざるをえないのであり、その意味で「取り違え」という認識論的次元での転倒とは区別されなければならない。もちろん、「取り違え」は、商品生産関係において諸個人が取り結ぶ関係ゆえに、ある一定の必然性をもって起こる転倒であり、この物象化された関係を支え、強固にする。だが、それは不可避ではない。「取り違え」は商品の本性を知ることによって回避しうるからだ。しかしながら、私的労働の関係が物象的な外皮のもとに現れるということは、商品生産関係における諸個人にとっては不可避である。

③物象化と商品語の論理

以上にみてきたように、物象化は私的労働にもとづく社会的分業から必然的に生まれてくるのであり、それはさしあたり諸個人の意志や欲望とは独立に必然的に形成される関係である[*10]。

彼らが「さしあたり実践的に関心をもつのは、自分の生産物と引き替えにどれだけの他人の生産物が手に入るか、すなわち、どのような割合で生産物が交換されるかという問題」（MEGA, II-6, 105）でしかない。にもかかわらず、彼らは、「脳髄の自然発生的な、したがって無意識的な、本能的な働き」（MEGA, II-5, 46）によって、彼らの労働生産物にたいしてそれを価値とするようにして関わり、労働生産物を社会的なものとして通用させるのである。私的生産者は自分の欲望にもとづいて意識的に行為するのであるが、その意識的行為をつうじて無意識のうちに物象化された関係を成立させるのである。

それゆえ、物象化を前提とするならば、人間の意志や欲望から独立した物象の論理を語りうることになる。その物象、すなわち商品の論理を展開したのが、価値形態論にほかならない。ここで価値形態論について詳述することはできないので、議論の展開上、重要なポイントだけを挙げることにしよう。

第一に、商品の価値物としての属性が価値形態を必然的に要請する。ある商品を単独でいくら考察しても、依然としてたんなる使用価値であるにすぎない。商品は、単独では自分が価値物であり、社会的な力を持っていることを示すことができないのである。それゆえ、商品（たとえばリンネル）は自らが価値物となるために、自分に他商品（たとえば上着）を等値する。リンネルは上着にたいしてそれを自らの等価物とするようにして関わり、上着を価値物とすることによって、自らに対してもまた、価値物としての形態を与える[*11]。こうして、商品は価値形態を獲得し、実際に価値物として存立することができる。逆に言えば、私的労働の生産物は価値という属性を獲得しなければならないからこそ、必ず価値形態を必要とするのである。価値が価値形態なしには存立し得ないにもかかわらず、価値から価値形態が生じる、あるいは価値から価値形態を展開しなければならないとマルクスが述べるゆえんである。

第二に、価値形態においては、形態と実体の必然的連関が形成される。価値形態においては物象の関わりをつうじて、同時に私的労働の関わりも作り出されるからである。リンネルが自分に上着を等値し、上着によって自分の価値を表現するという価値関係の内部では、上着はリンネルの等価物しての、したがってまた価値物としての意義しか持たない。それゆえ、上着を生産する私的労働もまた上着をつくる裁縫という労働は裁縫と織布に共通する抽象的人間的労働としての意義しかもたないのであり、そのような規定性を実際に与えられる。そして、これによってリンネルを生産する織布労働も抽象的人間的労働としての規定性を与えられるのである。ここにも示されているように、私的労働が価値という形態において社会的性格を獲得する際には、私的労働はその具体的有用的性格を捨象された、抽象的人間的労働としてのみ社会的性格をもち、互いに関連しあうにすぎない。ゆえに、価値の実体は抽象的人間的労働であり、価値は抽象的人間的労働の対象化であると言われるのである。

以上は、私的労働の生産物が価値物としての性格を獲得しなければならない限り、すなわち商品でなければならない限りでは、必ず成立しなければならない事態であり、人間の意志や欲望とは独立に成立する[*12]。ゆえに、マルクスは価値形態論において人間の欲望の契機を捨象し、そこで形成される必然的な物象の論理を商品語という比喩を使って叙述したのである[*13]。この商品の論理は、価値表現にもっとも適合した一般的等価物の形成までにすすまざるをえない。価値形態の展開は、単純な価値形態においては「リンネルだけに通じる言語」[*14] にすぎなかった商品世界の言語が、人間世界の言語を方言[*15] としてしまうようなコスモポリタン的言語（「商品の一般的言語」[*16]）へと生成する論理的過程にほかならないのである。

したがって、私的労働にもとづく社会的分業を前提するならば、物象化は必然であり、物象化を前提するならば、一般的価値形態およびそこでの形態と実体の連関の成立は必然となる。これは、人間の行為によって形成されるにもかかわらず、人間の具体的な意志や欲望からは独立に、関係そのものの本性によって必然的に形成される関係である。私的諸個人が無意識のうちに成立させる、このような「商品語」の論理、価値形態の論理こそが諸個人の恣意や行為を根底において規定しているのである。それゆえ、この必然的関係のことを無意識の形態的論理と呼ぶことしよう。

この形態的論理は人間たいしては物象的関係としてのみ現象し（価値形態論の次元での価値物と価値体の区別）、それゆえ、絶えず物神崇拝を生み出す。

④物象の人格化

以上においては、無意識のうちに成立する物象の側の論理を明らかにしたが、それだけでは現実の交換関係は形成されない。商品はただ他商品を自分の価値表現の材料にするだけであり、特定の使用価値を必要とするのではないからだ。それゆえ、交換関係が成立するには、具体的な意志や欲望をもつ諸個人が商品の人格的な担い手として現れなければならない。そこでは諸人格がたんに自由意志に基づいて労働生産物を商品として交換しているような外観をとる。しかし、他方で、ここでは諸個人は物象の力によってのみ他者との社会的関係に入りうるのだから、諸個人の振る舞いはあくまで物象の人格的担い手としてのそれでしかない。このような事態を「物象の人格化」と呼ぶ[*17]。

物象の人格化においてポイントとなるのは、次の二点である。

第一に、この「物象の人格化」の次元において、私的諸個人が互いに物象の人格的担い手として承認しあうことによって成立する近代的な私的所有について扱うことができる。

第二に、「物象の人格化」の次元においては、諸人格は「商品には欠けている商品体の具体性にたいする感覚を、彼自身の五感およびそれ以上の感覚でもって補う」(MEGA, II-6, 114)のであり、ここにおいて素材の次元が導入されることになる。これまでの考察で焦点が当てられたのは商品生産関係を前提する限り必然的に生じる形態的論理であり、素材はこの形態規定の担い手としてのみ考察の対象とされた。しかし、「物象の人格化」の次元においては、必然的な形態的論理を前提として素材的次元がどのように作用するのか、あるは素材的次元が形態的論理によっていかに変容させられていくのか、が問題となる。これによって、金と一般的等価形態が癒着し、貨幣が形成されること、また、貨幣の人格化によって貨幣蓄蔵への欲求、絶対的致富への欲求が生まれることを説明することが可能になる。

2，物象化と所有

①物象と近代的所有

近代的私的所有論の第一のポイントは、物象化された関係が所有の前提になっていることだ。俗論が言うように、私的所有が基礎にあり、物象化された関係が生まれるのではない。逆である。所有 Eigentum とは社会的に承認された占有 Besitz に他ならないが、商品生産関係においては諸個人の労働ではなく、生産物が物象として社会的力を獲得しており、諸個人は互いを物象の私的所有者として承認するほかない[*18]。ここでの社会的承認は物象の力に依

存することによってのみ成立するのである。したがって、私的諸個人による私的労働が生み出す物象化こそが近代的な私的所有の根底にある。私的所有を成立させる権利・意志関係は経済関係の反映にほかならないと言われるゆえんである。

それゆえ、ここでいう経済関係を歴史貫通的な分業一般の発展に解消してはならない[*19]。分業は物象化の素材的条件をなすにすぎない[*20] マルクスがたびたび例に出すように古代ペルーにおいては高度な分業と共同的生産が両立していた。分業が直ちに物象化を帰結するわけではない。人格的関係が切断された物象的依存関係において、はじめて物は物象となるのであり、この物象化を基礎として近代的な私的所有が打ち立てられるのである。

第二のポイントは、物象の人格化が生み出す外観との関わりである。物象化された関係においては物象の所持者が、自らの欲望を満たす物象の所有者として、相互に承認しあうことによって私的所有が成立する。もちろん、ここでは諸個人の意志関係が所有という承認関係を形成し、諸個人の欲望や使用対象それ自身がこの承認の動機をなすという意味で人格的契機が重要な役割を果たす。だが、この承認が物象を媒介するものとしてしか行われない以上、諸個人の人格は物象の代表者としてしか意味をなさないのである。

たとえば、貨幣所持者が市場において「自由」に商品を選択し、購買する行為はたしかに貨幣所持者自身の行為には違いないが[*21]、その行為は直接的交換可能性を持つ物象としての貨幣の力に全面的に依存したものでしかない。というのも、貨幣所持者は彼が持つ何らかの人格的特性ゆえに他者と交換関係に入ったのではないからである。商品世界において貨幣が排他的にもつ社会的力にたいする人々の信頼ゆえに、彼はその人格とはかかわりなく、他者と承認関係に入ることができたのである。したがって、ここでの「自由」は貨幣所持者としての「自由」、人格化された貨幣としての「自由」でしかない[*22]。

②共同体的所有と近代的私的所有

マルクスの共同体論の核心的問題意識は何よりも近代以前の所有と近代的所有の決定的な差異を掴み、本源的蓄積の意義を明らかにすることにあった。抽象的に考察するならば、前近代的所有も近代的所有と同様に社会的に承認された占有だと言うことができるが、その内実はまったく異なっている[*23]。

第一に、アジア的、ローマ的、ゲルマン的形態[*24] のいずれにも共通する、本源的な所有形態においては、生産者がはじめから生産条件にたいして、それを自分の諸条件とするようにして関わる。近代的私的所有においては、諸個人は物象の所持者として登場し、互いを人格化された物象として承認しあうことではじめて所有が成立する。所有は物象に媒介され、また、その物象を生産する労働（それが自己労働か他者労働かはともかく）に媒介されて現象するほかない。ところが、本源的所有においては「労働者の所有関係は労働の結果ではなく、前提である」（MEGA, Ⅱ-1, 416）。つまり、生産者たちは初めから、自然発生的に自然的生産条件にたいして自分の所有物として関わるのである。その意味で、生産者たちは「自分の自然的生産諸条件にたいして、それをいわば延長された身体をなすにすぎない自分自身の自然的諸前提とするようにして関係する」（MEGA, Ⅱ-1, 395）。

第二に、この本源的所有は、個人がある共同体・共同社会[*25] の成員であることを前提する[*26]。所有が占有の社会的承認である以上、そのあり方を本質的に規定するのは人間たちのあいだの関係である。人間たちは、自分たちが共同体・共同社会の一員であるということに媒介され

てはじめて、大地をはじめとする生産諸条件を本源的に所有することができる。そこでは、物象の力に依存することなく、はじめから承認関係が成立しており、諸個人が大地にたいしてそれを自分の所有物とするようにして関わることも、本源的に認められている。

また、本源的所有形態の二次的転化形態である農奴制や奴隷制においてすら、「労働そのものが生産の非有機的条件として、家畜とならんで、あるいは大地の付属物として、他の自然的存在と同列に置かれる」かぎりで、「生産の本源的条件は生産者の自然的前提として、自然的生存条件として現れる」のであり、農奴や奴隷も自らの生存条件から切り離されていない（MEGA, II-1, 394）。すでに、ここでは本源的所有は変形させられてしまっているが、しかしそれでもなお、近代におけるような生産者と生産手段の分離はなされていない。

第三に、本源的所有においては、生産の目的は共同社会の成員としての諸個人の再生産であり、これを可能にする諸条件の再生産である。「古代人のもとでは、どのような形態の土地所有等々がもっとも生産的であり、最大の富をつくりだすか、というような研究が見いだされることはけっしてない。富は生産の目的としては現れない」（MEGA,Ⅱ-1,391）。これにたいし、近代社会においては「生産が人間の目的として現れ、富が生産の目的として現れる」（MEGA,Ⅱ-1,392）。ゆえに、マルクスはこう言うのである。「古代世界は、完結した姿態、形態が、また所与の限定が追求される場合には、［近代的なものに比して］より高いものである。それは、ある狭い視点からみて満たされた状態である。他方、近代的なものは、満たされないままになっており、あるいは、それが自足したものとして現れるときには、低俗である」（Ibid.）。近代においては、貨幣が生み出した絶対的な致富衝動にもとづいて生産活動が行われるのであり、このような物象に媒介された素材への関わりは、人間であれ、自然であれ、素材的世界の再生産を攪乱しないではいない[*27]。

前近代的所有形態がもつ以上の根本特徴が、物象化を前提とした近代的私的所有と全く異質なものであることは明らかであろう。見てきたように、本源的所有においては諸個人は生まれながらにして共同体・共同社会の成員として承認されている。だからこそ、諸個人は本源的に土地、生産手段にたいしてそれを自らの所有とするようにして関わることができるのである。ところが、近代においては本源的に所有者であることはありえない。物象を媒介として契約を結ぶことによってしか、所有者たることはできないのである。

それゆえ、前近代から近代的な所有形態への移行にあたっては、自然と人間の関係を根本的に変革する「大転換」が必要とされる。それは一言で言うなら、人間の大地への本源的な関わりを断ち切るということだ。つまり、「生きて活動する人間たちと、彼らが自然とのあいだで行う素材変換の自然的、非有機的諸条件との統一」（MEGA, II-1, 393）を破壊し、両者を分離することである。そこでは、もはや人間が自然を本源的に所有することはできず、その根本においては無所有となる。人間と大地との本源的統一にもとづく共同体・共同社会も解体され、人間が個別化される。所有は物象をめぐる外的関係に依存してのみ成立しうるものとなり、人格的関係ではなく、物象的関係に依拠するために排他的性格を帯びるようになる。人間たちは「剥き出し」（MEGA, Ⅱ-1, 379）の状態で社会に投げ出される。

これは、生産する諸個人の生存条件にたいする本源的な関係の徹底的な解体であり、「剥き出し」の状態におかれた無所有者、「無保護な vogelfrei プロレタリアート」の創出である。また、このように諸個人があらゆる本源的な生存条件から引き剥がされることによって、商品生産関係が社会生活の全範囲に浸透し、近代的私的所有＝本源的無所有が全面的に成立し

ていく。というのも、諸個人が生産条件から切り離され、生活手段との結びつきを断たれるために、生活手段の大部分が商品化されるからである。さらに、このことをつうじて、土地および生産手段が物象として自立化し、無所有者に対立するようになる[*28]。自己増殖しうるだけの貨幣を所有する資本家や、素材的富の生産の必要条件である土地を物象として排他的に所有する土地所有者を除く、大半の人々は自らの人格と切り離すことができない労働力をあたかも物象のように販売し、生活手段を手に入れることを強制される。ここでは、労働者の生存の可能性は偶然的な物象的連関にゆだねられるのであり[*29]、労働者たちは潜勢的にはすでに貧民となっている[*30]。「自由な労働者という概念のなかには、すでに、彼が貧民 Pauper であるということ、潜勢的な貧民であるということが含まれている」（MEGA, II-1, 492）のである。

このように、諸個人が生存条件から本源的に切り離され、潜勢的な貧民にされしまっているからこそ、マルクスはそれを「絶対的貧困」（MEGA,Ⅱ-1,216）と呼んだのだった。すなわち「対象的富の欠乏としての貧困ではなく、それから完全に締め出されたものとしての貧困」（Ibid.）であり、無所有としての貧困である[*31]。近代資本主義社会とはこのような絶対的貧困を常態化する社会にほかならない。

マルクスが強調するのは、たんなる貨幣の溜め込みが資本を創出するわけではないということだ。共同体所有を解体し、人間を本源的に生存条件から切り離すためには、長期にわたる歴史的プロセスを要する[*32]。ここでそのプロセスを詳しく検討はしないが、そのような諸条件の歴史的創出には、物象化とそれに伴う素材的欲望の拡大、またそれに刺激を受けた国家の暴力的介入が必要となる。物象化された世界を「社会的自然」と錯覚する古典派経済学の理解とは反対に、「資本は頭から爪先まであらゆる毛穴から血と汚物をしたたらせながら生まれてくる」のである（MEGA, II-6, 680）。

3，物象の運動による素材的世界の編成[*33]

①価値実体としての抽象的人間的労働

物象化を前提すれば、価値実体が人間労働であることは当然のことである。というのは、私的諸個人へと分裂しているがゆえに、諸個人は労働を直接に社会的に通用させるかわりに、労働生産物に価値という社会的力を与えざるをえないからである。言い換えれば、労働が社会的総労働の一環であることを直接に確証するのではなく、物象的連関を媒介して確証しているにすぎないのだから、価値が労働の一定の反映であることは言うまでもないことである。だが、あくまでも「一定の反映」でしかない。というのも、すでにみたように、労働は物象を媒介することで、そのありのままの労働ではなく、抽象的人間的労働として自らの社会的性格を反映するほかなくなるからだ。

商品章冒頭の議論は、交換価値を前提した上で、まず価値概念、そしてそれと同時にその実体である抽象的人間労働を抽出するものである。この抽出を抽象的で形而上学的な議論だという批判がベーム・バヴェルク以来、連綿となされてきたが、そうした批判は妥当ではない。というのは、マルクスは研究においては交換価値から抽象的人間労働を抽出したのではないからだ。そうではなく、マルクスはなぜ労働が価値という形態をとるのか、と問うたのである。交換価値を不動の前提として議論する発想こそが物象化の産物にほかならない。マルクスは、そうではなく、私的労働から出発して価値の必然性をとらえ、そこから価値表現、その発展形

態としての貨幣の必然性を把握した。そして、同時にそのような物象的連関において表現されうる労働の質が、抽象的人間労働でしかないことを掴んだのである。

しかし、以上の議論を、価値の実体である抽象的人間労働はたんなる関係の産物にすぎないとして、その素材的側面を切り捨てようとする廣松らの議論と取り違えてはならない[*34]。抽象的人間的労働は一面的であれ、素材的契機を含むのである。

なるほど、人格的結合にもとづく近代以前の社会においては、抽象的人間的労働と具体的有用労働は分離せず、一体となって社会的意味をもつものとして通用していた[*35]。それゆえ、抽象的人間的労働という労働の一契機が独自の社会的意義を獲得するのは、物象化された社会においてのみであり、その限りでは抽象的人間的労働は労働の特殊な社会的形態だということができる[*36]。しかし、だからといって抽象的人間的労働が素材的契機を含まないことにはならない。というのも、抽象的人間的労働は素材的次元での労働実践から特殊な具体的有用的側面を捨象したものであり、いかに一契機でしかないとはいえ、依然としてそこには素材的契機が含まれているからである。その限りでは、抽象的人間的労働はいかなる社会的形態の労働にも含まれる素材的契機である[*37]。だからこそ、マルクスは「すべての労働は一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であり、同等な人間的労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する」（MEGA, II-6, 79）と言うのである。

②価値概念の「実践的・批判的」意義

このことはけっして些細な字句解釈の問題ではない。これを掴んでおかなければ、たとえば、絶対的剰余価値の生産において労働者の文化的および生物学的生存が破壊されていくことの意味が理解できなくなる。総じて『資本論』において問題になっているのは物象の運動、価値の運動をつうじた素材的世界（有用労働や自然の次元）の編成とそこでの軋轢、矛盾なのであり、この際、抽象的人間労働という概念は価値と素材との連関の結び目となっているのである。

関係主義や構造主義へとマルクスの理論を還元するタイプの議論は、形態と素材の連関がつかめていない。商品生産関係においては、諸個人の素材的実践が無意識のうちに素材的論理から独立した「商品の論理」（商品語）あるいは「価値の論理」を成立させるという逆説的な関係が実際に存立している。だからこそ、この価値の形態変換が資本という形態をとり、価値が主体化するやいなや、資本が素材的世界を編成し、価値の論理と素材の論理との軋轢を引き起こすのである。つまり、私的労働にもとづく社会的分業という一定の関係を前提するならば、まさに素材的実践それじしんが素材から独立した威力をもつ形態の論理を作り出すからこそ、形態の論理は素材的実践、素材的世界を規制し、編成するのだ。この形態と素材の媒介となっているが抽象的人間労働にほかならない。この点を理解するか否かが、形態と素材の衝突から物象化を乗り越える変革実践の条件を見いだしていくという『資本論』全体の主題を理解できるかどうかを決定するといっても過言ではないだろう。

価値の主体化としての資本は抽象的人間労働を媒介として現実の素材的世界を編成していく。というのは、資本とは価値増殖の運動にほかならないのであり、その価値に反映されるのは素材的世界そのものではなく、素材的世界の一契機をなすにすぎない抽象的人間労働であるからだ。逆に言えば、素材的世界は抽象的人間労働の現実的土台としての意義しかもたず、むしろ価値－抽象的人間労働という一面的な論理にしたがって編成されていくのである。価値

は労働という現実の実践に裏打ちされているが、しかし抽象的人間労働という一面的な契機しか反映しない。自然や有用的労働という素材的世界はこの一面的な運動の手段として編成されるだけである。

この一面的な形態的論理にもとづく素材の編成は、素材的世界のなかに様々な軋轢と矛盾を生み出さざるをえない。この形態的論理は、人間の意志や欲求、素材的論理から独立に成立するにもかかわらず、素材的世界を自らに適合するように変革しようとするのであり、素材的世界における軋轢と矛盾は必然となる。このこのような物象と素材との矛盾、軋轢を明らかにし、そこに変革のエレメントをさぐるのがマルクスの価値概念の意義なのである。

③資本のもとへの労働の形態的包摂における軋轢

資本の飽くなき価値増殖衝動は絶対的剰余価値を獲得するために、労働日を最大限延長することを追求する。当然のことながら際限のない労働日の延長は労働者の文化的生活や健康を破壊し、最終的にはその生命すら消耗し尽くす。「労働日」で問題にされるのは、けっしてたんなる剰余価値の絶対量の拡大ではなく、際限のない資本の増殖欲求が形態的包摂の次元で素材的世界にどのような影響を与えるのかということなのである。この素材的軋轢が労働者の側からの抵抗として現れ、この反作用が国家権力に反映し、法律的規制というかたちで労働日の延長にストップがかけられ、形態的包摂に一定の限度が設けられる。まさに「労働日」は、形態が素材をいかに編成し、素材からの反作用によって形態がどのような修正を受けるかという、形態の論理と素材の論理の衝突を主題にしているのである。ここでは、素材的論理にもとづく抵抗こそが、物象的論理を修正し、そこに物象的論理を抑制し、乗り越えていくための条件を作り出す（「それなしには、いっそう進んだ改善や解放の試みがすべて失敗に終わらざるをえない先決条件は、労働日の制限である」（MEGA, I-20, 229））。このように、マルクスの剰余価値生産論のポイントは、剰余価値量にあるのではなく、より多くの剰余価値量を獲得しようとする資本の運動がいかに素材的世界に影響を及ぼすのかを問題にしているのである。

④資本のもとへの労働の実質的包摂における軋轢

資本はより発展した生産力を実現し、規律化された従属的な賃労働者を生み出すことによって、たんに素材を形態に従わせるだけではなく、素材的世界じたいを自らに適合させる。「生産関係、カテゴリーーここでは資本と労働－の特殊的な規定性は、特殊的な物質的生産様式の発展と産業的生産諸力の発展の特殊な段階とともにはじめて真実となる」のである（MEGA, II-1, 217）。このことは、一方では人間たちの素材的世界への抵抗を困難にし、資本により適合的な素材的担い手を形成するであろう。しかも、本節のように、生産過程だけに限定するのではなく、流通過程、総過程における物象化の重層化、それにともなう物化の進展を考えるならば、形態の論理は素材的世界にいっそう深く浸食していく。

しかしながら、他方、資本はそのような素材的世界の変容を、素材的世界の一契機でしかない抽象的人間的労働をいかに効率的に吸収するかということだけ問題にして行うのであり、そのことは素材的世界に軋轢、矛盾をもたらさずにはいない。資本の価値増殖運動そのものはもちろん、この傾向に歯止めをかける動機を持たないし、資本の人格的担い手である資本家も、競争による外的強制によって、彼の意志にかかわりなく、最大限の価値増殖を追求する

ことを余儀なくされるのであり、この傾向に歯止めをかけることはできない。素材的世界の破壊がやがて資本の存立すら危うくするにもかかわらずである。

それゆえ、資本はけっして世界を完全に包摂しきることはできない。あるいは形態的に包摂するだけならば可能かも知れないが、素材的世界そのものを形態の論理に完全に従属するよう実質的に包摂することなどできない[*38]。このような、形態的論理によってはけっして包摂することのできない素材的世界の論理こそが、形態的論理の主体化としての資本の運動に歯止めをかける力となる。それは、過度の長時間労働に悲鳴を上げる人間の肉体と精神から、たとえ規律訓練されようとも空疎化された工場労働において疎外を感じざるを得ない賃労働者の感性的欲求から、絶えず生み出されるだろう。また、たとえ一時的には近代科学の統制に服したようにみえても、長期的にはけっして形態に従属させられることのない土壌やその他の自然環境も、それじたいが資本の運動を妨げる抵抗となるとともに、人間たちに資本への抵抗を促す契機ともなる。

以上のような素材的世界からの抵抗の諸契機を基礎にしてこそ、賃労働者たちが物象の力によって生み出された仮象をみやぶり、「生産物が自己自身のものだと見抜く」、そのような「並外れた意識」が生まれてくるのである（MEGA, II-3, 2287）[*39]。「並外れた意識」は、たんなる啓蒙や「正義についてのお喋り」から生まれてくるのではない。根源的には、素材の論理から生まれでてくる。したがって、それは資本が生み出した素材的世界の軋轢、矛盾そのものに基礎を置いているという意味で、「それ自身が資本主義的生産様式の産物」なのである。

小括

マルクスは多くの場合、形態についての思想家（関係主義、経済学）、あるいは素材的世界の一契機である人間についての思想家（疎外論）だと考えられてきた。しかし、マルクスの抜粋ノートをみるなら素材の思想家であったことはあきらかである。疎外論は、マルクスが素材の思想家であったことの一側面を表現する思想であるに過ぎない。また経済学批判における形態への着目もつねに素材との連関で捉えられなければならない。マルクスは素材の論理を掴むためにこそ、形態の論理を掴んだのである。だからこそ、マルクスは第一章、とりわけ価値形態論において徹底的に意志や欲望の契機を排除して私的労働を前提とする限り必然的に発生せざるえない形態の論理を明らかにし、そのうえで形態による素材の編成について展開したのである。

しかし、資本論においては形態によって編成される限りでの素材が問題になっているのであり、素材の論理がそれじたいとしてとりあげられているわけではない。マルクスは資本論第一巻執筆後、共同体研究、農業化学研究に非常に多くの精力を傾けている。このことは、マルクスはたんに形態の矛盾から変革を志向したのではなく、また、形態と素材の軋轢だけから変革の条件を見いだそうとしていただけではなく、素材そのものの力に着目して変革を構想しようとしていたことを示している。つまり、恐慌や労働者階級の階級闘争だけではない要素によって物象化に対抗する変革構想へと移行しつつあったように思われる。それは現代的に言うなら、反グローバリズム、エコロジー、地域コミュニティにもとづく新たなライフスタイル形成、生の次元での権力への抵抗などと表現することもできるだろう。マルクスの物象化論の意義を明らかにすると言うことは、このような射程をもったものでなければならない。これが21世紀に

おけるマルクス研究の課題であると思われる。本稿で述べたような議論は、この課題に取り組むための前提作業にすぎない。

---

*1　久留間が示した貨幣成立の「いかにして、なぜ、なにによって wie, warum, wodurch」は貨幣論にとってだけではなく、物象化論にとっても重要な意味を持つ。この三つの課題の違いを明確に理解することなしに、物象化論の適切な理解はありえない。

*2　「哲学者たちはただ世界をさまざまに解釈してきたにすぎない。肝腎なのは、世界を変革することである」（フォイエルバッハ・テーゼ（11））。また、次のジークフリート・マイアー宛の手紙も参照されるべきである。「仕事のできる瞬間はすべて私の著作［『資本論』第一巻］を完成するために利用しなければなりませんでした。この著作のために私は健康もこの世の幸福も家族も犠牲にしてきたのです。…もし人が牛のようなものでありたいと思えば、もちろん人類の苦しみなどには背を向けて自分のことだけ心配していることもできるでしょう。しかし私は、もし私の本を、少なくとも原稿のかたちででも、完全に仕上げないで倒れるようなら、ほんとうに自分を非実践的だとかんがえたでしょう」（MEW, 31, 542）

*3　「フォイエルバッハはキリスト教の本質の中で、理論的な態度だけを真に人間的なものとみなし、他方、実践はただ、その汚れたユダヤ的な現象形態において、捉えられ、固定化される。それゆえ、彼は『革命的活動』、『実践的・批判的』活動の意義を理解しない」（フォイエルバッハ・テーゼ（1））。ここでいう「実践的・批判的」という語は、マルクスの哲学批判と密接に関係している。この点について、拙稿「マルクスの「哲学」批判と「新しい唯物論」－『経済学哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』の「哲学」批判の差異をめぐって－」唯物論研究協会編『唯物論研究年誌』第 14 号を参照。

*4　ここでは物象化論のすべてを扱うことはできない。報告の主題との関わりで限定的にのみ扱っていることをご了解いただきたい。物象化論の詳細については博士論文で詳論する。

*5　なお、物神性論と価値形態論の関係を適切に理解している研究としては、久留間鮫造や大谷禎之介の諸著作・諸論文のほかに、宮沢俊郎『価値と資本概念形成』青木書店、1993 年を挙げることができる。

*6　「交換価値においては…人格的な力能 Vermögen は物象的な力能に転化している」（MEGA, II-1, 90）

*7　「たんなる諸使用対象を商品に転化するものだけが、諸商品を商品として相互に関係させ、したがってまた社会的関係に置きうる。ところで、このものこそ諸商品の価値なのである」（MEGA, II-5, 38）

*8　「生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関連は、そのあるがままのものとして、すなわち、諸人格の、彼らの労働における直接的な社会的関係としてではなく、むしろ諸人格の物象的関係および諸物象の社会的関係として現れるのである」（MEGA, II-6, 103）。

*9 「社会的運動が、彼らにとっては、諸物象の運動という形態をとり、彼らはこの運動を制御するのではなく、この運動によって制御される」（MEGA, II-6, 105）

*10　「人間たちが彼らの労働生産物を価値として互いに関連させるのは、これらの物象が彼らにとって同種の人間的労働のたんなる物象的外皮として通用するからではない。逆である。彼らは、彼らの異なる種類の生産物を交換においてたがいに価値として等値することによって、かれらは彼らの異なる労働をたがいに人間的労働として等値するのである。彼はそれを知らないが、それを行う」（MEGA, II-6, 104）。

*11　商品は単独で考察した場合にも、私的労働の生産物という意味で価値という規定をもっているが、まだ、それに相応しい形態を獲得していない。商品がじっさいに価値物としての形態を獲得するためには、他商品と関わり、それを媒介するほかない。

*12　以上に関して詳細は、拙稿「価値形態論における「商品語」について－『資本論』における物象化論の適切な理解のために－」『一橋社会科学』第7号、2009 年 8 月

*13　この商品語という比喩の重要性については、マルクスは「『資本論』第一巻にたいする補足と変更」（以下、「補足と変更」と略記する）という初版の改訂のための草稿において示されている。なお、マルクスはこ

の草稿において驚くほど丹念に改稿を重ね、第二版の商品章の原型を作り上げており、価値形態論および「物神性」節の理解にとって極めて重要な材料を提供している。しかも第二版においては必ずしも明確に言われていないことが、わかりやすく述べられている箇所もいくつかある。にもかかわらず、これまでこの草稿を付属資料の異文目録も含めて本格的に検討した研究が存在しない（小黒正夫による部分的検討のみ）。付属資料の異文目録も含めてできるだけ参照し、価値形態論および「物神性」節の理解のために活用する。今後の価値形態論研究はこの草稿を参照することが最低限の条件となるであろう。

*14　「商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語 Warensprache で、その思い Gedanken を打ち明けるだけである。労働が人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルと等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、リンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの崇高な価値対象性がリンネルのぎこちない身体とは異なっているということを言うために、リンネルは、価値が上着に見え、したがってリンネル自身が価値物 Werthding としては上着と瓜二つであると言う」。（MEGA, II-6, 85）

*15　「ついでにいえば、商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、あるいはより正確な、あるいはより不正確な、方言をもっている。たとえば、ドイツ語の Wertsein は、ロマンス語系の動詞、valere, valer, voloir に比べて、商品 B の商品 A との等値が商品 A 自身の価値表現を言い表すには不適切である」（MEGA, II-6, 85）

*16　「人間相互のコスモポリタン的連関は本源的には彼らの商品所持者としての関係にすぎない。商品はそれ自身宗教的、政治的、国民的、言語的ないっさいの障壁を超越している。商品の一般的言語は価格である」（MEGA, II-2, 213）

*17　なお、物象の人格化は物象が主体となって人間を支配するという意味でも用いられるが、より重要なのはここで述べた用法である。ここで述べた意味での「物象の人格化」についてはじめて明確化したのはルービンである（イサーク・ルービン『マルクス価値論概説』竹永進訳、法政大学出版局、1993 年、19 頁）。なお、大谷禎之介『図解　社会経済学』桜井書店、第 11 版、2010 年、79 頁も参照。

*18　「これらの物を商品として互いに連関させるためには、商品保管者たちは、その意志をそれらの物にやどす諸人格として互いに関係し合わなければならない。それゆえ、一方はただ他方の意志のもとにのみ、したがってどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自己の商品を譲渡することによって他人の商品をわがものとする。したがって、彼らは相互に私的所有者として承認しなければならない。契約をその形式とするこの権利関係 Rechtverhältnis は、法律的 legal に発展していてもいなくても、経済的関係がそこに反映する意志関係である。この権利関係ないし意志関係は経済的関係そのものによって与えられている。諸人格はここではただ、互いに対して商品の代表者としてのみ、それゆえまた商品所持者としてのみ、現存している」。（MEGA, II-6, 113）

*19　「交換者たちが交換価値を生産するという前提が、たんに分業一般を前提しているばかりではなく、分業の特殊な発展形態をも前提している」。（MEGA, II-2, 50）

*20　とはいえ、このことは物象化にとって素材的条件がどうでもよい、ということを意味するのではない。むしろマルクスの考察の中心はまさにこの素材の次元にある。社会的形態規定が物の属性として現れることによって、人間の素材への態度が変容するのである。しかしながら、物象化の直接的前提となる社会的形態規定と素材的規定を混同するならば、素材の次元自体が捉えられなくなってしまう。なお、分業の素材的条件と社会的形態との関連は『資本論』第一巻第十二章「分業とマニファクチュア」で比較的詳しく論じられている。

*21　マルクスは『経済学批判』原初稿において、商品交換の場面での「自由」を次のように規定している。「自由という連関は交換の経済的形態規定に直接に関わるのではなく、交換の法律的 juristisch 形態に関連するか、あるいはその内容、つまり使用価値あるいは欲望そのものに関わる」（MEGA, II-2, 57）。

*22　マルクスはこのような物象の人格化としての「自由」を徹底的に批判する。「この種の個人的自由は同

時に、いっさいの個人的自由の完全な止揚であり、物象的諸力という形態、それどころ圧倒的な力を持つ諸物象－たがいに連関しあう諸個人自身から独立した諸物象－という形態をとる社会的諸条件のもとへの個性の完全な屈服である」（MEGA, II-1, 537）。

*23　以下の一節はマルクスの共同体的所有形態論の核心を端的に示している。「したがって所有は本源的には－それゆえそのアジア的、スラヴ的、古代的、ゲルマン的形態においては－労働する（生産する）主体（すなわち自己を再生産する主体）が生産あるいは再生産の諸条件にたいして、それを自分の諸条件とするようにして関わる verhalten[*22] ことを意味する。したがってまた、所有はこの生産の諸条件にしたがって様々な形態を持つであろう。生産そのものの目的は生産者を、彼がもつこの客体的定在諸条件において、そしてこの諸条件とともに、再生産することである。このように所有者として－労働すなわち生産の結果としてではなく、前提として－関係することは、個人がある部族組織または共同社会の成員として一定のしかたで定在することを前提する」。（MEGA,Ⅱ-1,399）

*24　なお、本源的所有のアジア的形態、ローマ的形態、ゲルマン的形態の三形態を旧来の「史的唯物論」的な解釈にありがちな歴史的順序の問題に解消してはならない。むろん、近年の研究においてアジア的→ローマ的→ゲルマン的などという歴史的順序を主張するものはほとんど存在しないが、これを抽象的な歴史把握一般の問題として捉えることじたいが誤りだということである。「諸形態」の叙述の狙いを理解してテクストを解釈するならば、アジア的、ローマ的、ゲルマン的という順序が純粋な本源的所有形態に対する近さ、逆にいえば資本主義的所有形態に対する遠さによるものだということが容易に理解できるはずである。また、それゆえに、マルクスはアジア的形態がもっともしぶとく持ちこたえる形態だと述べているのである。つまり、物象化的形態から論理的に遠い形態ほど、それにたいする頑強な抵抗力をもつ。

*25　本報告においては渡辺憲正の区別を採用し、共同体 Gemeinde、共同社会 Gemeinwesen とする。前者が政治的組織としての共同体であり、後者はそれを再生産組織としてみたものである。

*26　「大地にたいして、それを所有物とするように関わることは、つねに、なんらかの多かれ少なかれ自然発生的な、あるいはすでに歴史的にさらに発展した形態にある部族、共同体が、平和的ないし暴力的に土地を占拠することによって媒介されているのである」。（MEGA,Ⅱ-1,390）

*27　「資本主義的生産様式は、それが大中心地に集積させる都市人口がますます優勢になるにしたがって、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と土地とのあいだの素材変換を、すなわち人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地肥沃度の永久的自然条件を攪乱する。…資本主義的農業のあらゆる進歩は、たんに労働者から略奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から略奪する技術における進歩でもあり、一定期間にわたって土地の肥沃度を増大させるためのあらゆる進歩は、同時に、この肥沃度の持続的源泉を破壊するための進歩である。…それゆえ資本主義的生産は、すべての富の源泉すなわち土地および労働者を同時に破壊することによってのみ社会的生産過程の技術および結合を発展させる」。（MEGA, II-6, 476）

*28　「賃労働者の一階級が形成されうるためには…労働条件が労働能力から分離されなければならない。そして、この分離の基礎は、土地そのものが社会の一部分の私的所有として現れることであり、こうして社会の他の部分が、自分の労働を利用するためのこの対象的条件から締め出されているということである」（MEGA, II-3, 350）。

*29　たとえば、労働者が労働力を販売することに失敗すれば、ただちに住居やその他の生活条件を失うことになる。このことが現在の日本においてもリアリティを失っていないことは、2008年以降の金融恐慌をきっかけにした非正規雇用の雇い止め問題においてまざまざと示された。この偶然性を緩和するための雇用保険その他の社会保障制度が脆弱であり、企業主義的統合（いまやこれが解体過程にある）がそれを代替してきたと言われる日本においては、雇用の偶然性による住居の喪失という問題はなんら過去の問題ではない。

*30　「労働能力以外の労働能力の実現の条件を欠いたあらゆる面からみての窮乏。資本家が彼の剰余労働を止揚することができなければ、彼は自分の必要労働をすることができず、自分の生活手段を生産すること

ができない。そこで、彼は生活手段を交換を通じて手に入れることができないのであって、もし彼がそれを手に入れるとすれば、それは収入からなされる施し物が彼の手に帰することによってでしかない。彼が労働者として生きていくことができるのは、ただ、彼の労働能力を資本のうちの労働ファンドをなす部分と交換する限りでしかない。この交換そのものが、彼にとっては偶然的な、彼の有機的存在にとってはどうでもよい諸条件と結びつけられている。だから彼は、潜勢的な貧民なのである」。（MEGA, II-1, 492）

*31　「61-63 草稿」においてもほぼ同様の言い方がされている。「労働手段および生活手段を奪われた労働能力は絶対的貧困そのものであり、また労働者は、そのような労働能力のたんなる人格化として、現実には自分の諸欲求をもっていながら、他方それらを充足するための活動は、ただ、対象をもたない、自分自身の主体性のなかに包み込まれた、素質（可能性）としてもっているにすぎない。労働者はそのようなものとして、その概念からして、貧民であり、自分の対象性から孤立化され切り離されたこの能力の人格化および担い手として貧民である」（MEGA, II-3, 35）。

*32　マルクスが、『資本論』第一巻の「本源的蓄積」論において、歴史的に発生した人間の大地からの切り離しを第一に挙げたのはその理由からであった

*33　マルクスは『要綱』で次のように述べている。「経済的形態規定の外部にあるこの内容は、ただ次のものでしかありえない。すなわち、第一に、交換される商品の自然的特殊性、第二に、交換者の特殊な自然的欲求、あるいは両者をあわせて、交換される諸商品のさまざまな使用価値」（MEGA, II-1, 166）。以下では、たんに「素材」といった場合、この「両者をあわせて」意味することとする。ただし、ここでいう「素材」には、この素材の素材的形態を変化させる具体的な有用労働も含めなければならない。たとえば、それは次のマルクスの言明にも示されている。「富の素材は、それが労働のように主体的なものであれ、自然的諸欲求または歴史的諸欲求の充足のための諸対象のように客体的なものであれ、さしあたりすべての生産時代に共通なものとして現れる」（MEGA, II-1, 715）。

*34　廣松『資本論の哲学』や日山紀彦『抽象的人間労働の哲学』などの著作においては同様の主張が繰り返されている。

*35　『経済学批判』においてマルクスが指摘しているように、労働が私的労働ではなく、共同的労働のかたちをとる共同体においては「労働の社会的性格は、明らかに個々人の労働が一般性の抽象的形態をとることによって、つまり彼の生産物が一般的等価物の形態をとることによって媒介されているのではない」（MEGA, II-2,　113）。あるいは、「中世の賦役と現物給付」においては、「自然形態にある個々人の特定の労働が、労働の一般性ではなくて特殊性が社会的紐帯をなしている」（Ibid）。労働が私的労働のかたちをとる社会においてはじめて、労働の社会性がその具体的性格を捨象された抽象的労働として獲得されなければならなくなるのである。とはいえ、このことは、近代以前の労働において人間的労働力の支出という契機が存在しないということではけっしてない。いかなる社会的形態の労働であれ人間的労働力の支出という契機を必ず含む。ただ、それが物象化によって価値として対象化され、社会編成の原理として独自の意義を獲得するのが近代なのである。それゆえ、抽象的人間労働は、労働の有用的性格から分離されてそれ自身で意味を持つ限りでは、独自の労働の社会的形態規定であるが、他方、いかなる社会的形態の労働にも含まれる素材的な契機でもある。

*36　それゆえ、マルクスは価値の実体をたんなる抽象的労働として捉え、それが物象化された関係における労働の社会的形態であることをみなかったフランクリンを次のように批判する。「しかし、彼は交換価値に含まれている労働を、抽象的人間的労働として、個人的労働の全面的外化から生じる社会的労働として展開しなかったから、必然的に、貨幣がこの外化した労働の直接的な存在形態であることを見落とした」（MEGA, II-2, 134）。

*37　もちろん、これは個々の労働者の素材的な人間労働力の支出がその労働生産物の価値量を決定するなどという通俗的なこと意味するのではない。物象化された関係に特有の社会的媒介、すなわち無意識の諸行為をつうじて一定の社会的関係が必然的に存立するという媒介を通じて、形態と素材とのあいだにある一定の

関係が成立するということを意味しているのである。

*38　ルカーチもこのことを見抜いていが、しかし、それを合理化と人間との矛盾とにおいて捉え、素材的世界総体との矛盾として捉えなかったところに不十分性がある。とはいえ、ルカーチの以下の指摘はきわめて先駆的であり、学ぶところが多い。「このように外見上は余すところ無く、人間の肉体的および精神的な存在の最深部にまで達する世界の合理化は、にもかかわらず、自分自身の合理性の形式的な性格に限界がある、ということを見いだすことになる。すなわち、生活の孤立化された諸要素の合理化や、その結果生じてくるー形式的なー合法則性は、たしかに直接には、また表面的にみると、普遍的な「諸法則」の統一的体系に組み入れられてはいあるが、しかしこの法則性の基礎である法則の質量 Materie がもつ具体的なものを軽蔑するために、法則体系は事実上支離滅裂となり、部分体系相互の関係は偶然的となって、これらの部分体系相互の自立性がー相対的にー増大するのである。このような法則体系の支離滅裂さがまったくはっきりと示されるのは恐慌の時期である」（Lukács, op cit, S.112.）。ここで言われる質量がマルクスの言う素材に相当するものであることは明らかであろう。

*39　「労働能力が生産物を自己自身のものだと見抜くこと、そして自己の実現の諸条件から分離を不公正ー強制関係ーだと判断することーこれは並外れた意識であり、それ自身が資本主義的生産様式の産物である」（MEGA, II-3, 2287）。すでに見たように、ほとんど同じ文章が『要綱』にもある。